

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2010～2013

課題番号：22251012

研究課題名(和文) 日本を含む外来権力の重層下で形成される歴史認識 - 台湾と旧南洋群島の人類学的比較

研究課題名(英文) Historical recognition constructed under control of multi-layered foreign powers, including Japan: An anthropological comparison between Taiwan and Micronesia

研究代表者

三尾 裕子 (MIO, Yuko)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号：20195192

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 32,400,000円、(間接経費) 9,720,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本統治を経験した台湾と旧南洋群島(国際連盟委任統治領)を対象に、これら地域の人々のローカルな視点に立って、(1)日本統治以前、文化的に「文明」を経験した度合いが異なる人々(例えば、中華文明を内在化していた漢人から、それとの接触が限定的であった台湾先住民族、西洋による統治を経験していた旧南洋群島の人びと)の間で、「日本」に対する認識が如何に生まれ、それが植民地期以後の歩みの中で如何なる姿を見せるのか、(2)日本の敗戦後、新たな外来権力により統治されたことが、これら地域の人々の歴史認識形成や文化の構築に如何なる影響を及ぼしているか、という問題に焦点を絞り、人類学的な調査研究を行った。

研究成果の概要(英文)：This research focused on Taiwan and Micronesia (a League of Nations mandated territory), both of which experienced Japanese colonial rule. Based on the perspectives of local people in these regions, anthropological case studies were carried out on two specific themes. First, we examined how people with varying degrees of experience encountering 'civilization' viewed Japan, and how their awareness of Japan was transformed. For example, before encountering Japan, the Han Chinese internalized Chinese culture, Taiwanese indigenous people experienced Chinese culture to a limited extent, and the Micronesian people experienced rule by Western nations. The awareness they had of Japan naturally differ from group to group according to the degree in which they had been exposed to other civilizations. Secondly, we ascertained the effects that rule by another alien power following Japan's defeat in World War II had on the development of historical awareness and culture among people in these areas.

研究分野：人文学C

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学 歴史認識 台湾 旧南洋群島 文明化 代行的脱植民地化 日本

1. 研究開始当初の背景

これまでの植民地主義に関する文化人類学的な議論は、西洋文明が「未開」を啓蒙したことを前提としてきた。また、日本の植民地統治に関する研究でも、西洋モデルと同様の分析枠組みが踏襲されてきた(例えば、山路・田中編 2002)。しかし、本研究で扱う日本統治を経験した台湾の漢人、台湾先住民族、旧南洋群島の人々は、日本と遭遇する以前に既に程度の差はあれ、文明との接触経験を持っていたため、日本は、被支配者が先に経験した「文明」の尺度から見て劣位にありながら、突如植民地化によりヘゲモニーを発揮せざるをえなくなった。即ち、日本の統治地域では、被支配者の側が支配者文化の優位性を必ずしもア priori に認めなかった点に留意すべきである。

また、被支配者の脱植民地化過程に関して、従来の議論では、被支配者自らが歴史や文化の構築主体となって、旧宗主国との関係性を築いてきたことが前提となっている。ところが、台湾や旧南洋群島では、日本植民地主義からの脱植民地化は、戦後の新しい外来権力によって代行され、日本に由来する文化や統治の歴史は、これにより無視あるいは否定的に扱われてきた。即ち、当該地域の人びとは、日本以外に新たな文化的ヘゲモニーをもった支配者と対峙することとなり、彼らが旧宗主国に対して構築するイメージ、自らの文化構築の際に利活用される「日本」という記号は、新たな支配者との関係性の中で操作される対象となった。

2. 研究の目的

上記の背景を踏まえて、本研究では、日本統治を経験した台湾と旧南洋群島(国際連盟委任統治領)を対象に、これら地域の人々のローカルな視点に立って、(1)日本統治以前、文化的に「文明」を経験した度合いが異なる人々の間で、「日本」に対する認識が如何に生まれ、それが植民地期以後の歩みの中で如何なる姿を見せるのか、(2)日本の敗戦後、新たな外来権力により統治されたことが、これら地域の人々の歴史認識形成や文化の構築に如何なる影響を及ぼしているか、という問題に焦点を絞り、人類学的な調査研究を行った。

3. 研究の方法

各年度とも、国内研究会と個別の現地調査を中心として活動した。その他、初年度と2年度目は共同調査を実施して、フィールドに対する共通認識を養った。そのほか、学会でパネルを組み、成果報告なども適宜行った。

4. 研究成果

平成 22 年度

問題設定、基本的な研究の方向性についての考え方の共有を図り、それに基づいて各自調査地での全体像を把握した。12 月末

に、国内メンバーほぼ全員が台湾に渡航し、中央研究院民族学研究所で共同研究会を開き、台湾の研究者と相互交流を実施し、研究状況の把握を行った。日本側からは、三尾裕子、遠藤央、植野弘子、宮岡真央子が、台湾の中央研究院からは、郭佩宜、黄智慧(ペーパー参加)が発表を行った。また、会議の後、現地調査を行い、台湾を専門とするメンバーの調査地や日本時代の史跡などを訪問し理解を共有した。

平成 23 年度

8 月下旬に、ほぼ全員がパラオ共和国、ミクロネシア連邦のヤップ島に渡航し、現地の研究者などと意見交換をおこない、またメンバーの調査地を訪問して、現地における日本統治の概要を把握するとともに、その後の現地社会の変容、人々の日本認識などについて、調査を行った。前年における台湾調査とあわせて、2 つの地域をとともに訪れることで、短期間とはいえ、ほぼ全員が各自の専門ではなかった地域での調査を経験した。このことにより、台湾と旧南洋群島の両地域の人々の日本認識についての異同に関して、各自が一定程度の比較の視座を得ることができ、専門地域での調査にその知見を活かす道が開かれた。

平成 24 年度

フィールドでの調査研究を深化させ、データを集中的に収集し、最終年度の取りまとめに向けての方向性を明確にした。3 月には日本オセアニア学会で分科会「旧南洋群島と台湾における日本イメージの形成 - 植民地支配に関わるモノを通じて」を組織し、本科研の成果の一部を世に問うた。本分科会では、メンバー数名が発表等を行った(座長:三尾裕子、発表者:上水流久彦、宮岡真央子、黒崎岳大、コメンテータ:飯高伸五、松金公正)。本分科会では、日本統治に関わったモノ(建築物、慰霊碑など)を主題とし、強烈なマテリアリティを保持する建築やモニュメントとそれを取りまく社会文化的環境の変化との相互作用に注目することによって、日本イメージの重層的な構造を明かにした。

平成 25 年度

最終年度になるため、フィールドでの研究の取りまとめを行った。国内では、日本による植民地支配や、それが被支配者のポストコロニアル期における社会構築に与えた影響を把握するために、比較対象として、イギリスやフランスをとりあげ、栗本英世氏(大阪大学)と平野千果子氏(武蔵大学)に発表いただいた。栗本氏はスーダンの事例から、植民地支配が与えたポストコロニアル期における抜き差しならない影響について、平野氏はフランス帝国の「文明化の使命」について発表いただいた。

5 月 26 日に日本台湾学会第 15 回学術大会で、分科会(「台湾とパラオにおける植民地経験 - 接触領域にみる「日本」)を組

織した(座長:西村一之、報告者:飯高伸五、石垣直、西村一之、三田牧、コメント:植野弘子、遠藤央)。3月には、ハワイ大学から David Hanlon 教授を招へいし、"Tosiwo Nakayama, Macronesia, and Japan"と題してご講演頂いた。日本人と現地人との間に生まれた Tosiwo Nakayama を通して、戦後のミクロネシアにおける「日本」の意味づけ、ミクロネシアの空間的な位置づけなどについて議論を行った。

各メンバーの調査研究の概要は以下の通り。()内は25年度における役割)

三尾裕子(代表者)は、研究の統括を行った他、現地調査については、台湾の新竹県と台東県において、先住民の日本教育世代の方々からのライフヒストリー調査を行った。また、日本においては、台湾での生活経験者からの聴き取りを行うことで、両者の他者認識の比較検討を行った。

遠藤央(分担者)は、ミクロネシアの信託統治を台湾の植民地統治と比較することを目的とする調査を、マーシャル諸島共和国のアレレ博物館併設の図書館、国立アーカイブでの史料調査、ミクロネシア連邦での日本時代の遺跡調査、新聞資料調査、ライフヒストリー収集、台湾における日本統治時代の史跡調査等を通して実施した。

植野弘子(分担者)は、植民地教育における日本の生活慣習と他者像を台湾と旧南洋群島において比較する研究をおこなった。台湾や朝鮮半島での植民地統治の特徴として、文化的「近似性」・「近接性」が指摘されるが、実際に植民地台湾の生活世界において、他者がいかに認識されていたのかについての考察を、特に、公学校、高等女学校の教育の中に取り入れられた日本の慣習、しつけ、行事などに焦点を当てて行った。他方、旧南洋群島では「島民」の子供は日本人家庭で「練習生」として「手伝い」をしていた。台湾との比較では、日本人と植民地の人々は、文化的近似性という点では遠い存在であったという植民地の生活世界の他者像がみえてきた。

上水流久彦(分担者)は、日本植民地期の建築物、施設、戦争の痕跡等の現状を分析して、台湾における「帝国日本」の位置づけを考察し、以下の点を明らかにした。(1)台湾では旧南洋群島と異なり、「日本」が台湾の国家認識、個人の認識のうえでも重要なファクターになっていること、(2)その主要な要因が日本と中華文明との競争的關係、東アジアの緊張した国家間関係にあることである。日本と中華文明の競争的關係は、文明の度合いが根本的に違ふとされるアフリカ等の「帝国」とは異なると考えられる。

西村一之(分担者)は、台湾東海岸の漢人と先住民アミの混住地域を調査し、日本認識に関する調査研究を主に以下の通り実施した。(1)日本から中華民国への統

治転換との関連について、特に言語の変更(日本語から中国語)に着目し明らかにした。(2)技術の拡散浸透との関連について、特に漁撈に着目し明らかにした。(3)抗日の記憶の歴史化と観光化について明らかにした。更に、パラオおよびヤップでは、旧南洋群島における日本統治の実践とその生活上の影響について調査し、台湾との比較研究に向けた検討を行った。

石垣直(分担者)は、台湾先住民ブヌンを中心に、様々な世代を対象に植民地経験や日本(対中国、対台湾)イメージについてインタビューを行った。その中から、世代や社会的なポジションによって経験や対日イメージが多様であること、台湾(本省人/外省人)日本、中国間の政治・経済的パワーバランスの変遷で、それらに対するブヌンのイメージにも変化があること、また、「脱植民地化」の中で、絶対的なマイノリティの位置におかれている先住民の多くが、支配者の歴史に自集団の歴史を同化・接合させつつ保護・救済を期待している状況が明らかになった。

飯高伸五(分担者)は、旧南洋群島における重層的統治経験に起因する日本認識の特徴の研究を行った。具体的には、(1)日本統治下の南洋群島で誕生した「ハーフ」(日本人男性移住者と現地人女性間に生まれた人々)の日本認識の検討、(2)日本統治期の社会変化との関連からみた村落レベルの集合的な日本認識についての検討をおこなった。(1)は「ハーフ」としての「日本」とは、戦後の日本への引き揚げ、家族との生き別れなど体制転換期の劇的な体験や、日本統治期とは大きく異なるアメリカ統治下の社会体制のなかで意味付けられていったものであり、植民地経験の重層性と不可分な関係のもとで形成されていったということが明らかになった。(2)は日本統治経験は集合的記憶として継承されながらも、村落の歴史に欠かせない要素として主体的な意味づけがなされていることが明らかになった。同時に、現在の日本を寛大な援助国として認識しつつも日本統治期および太平洋戦争時に受けた損害の補償を改めて求める動きがみられるなど、統治や戦争の記憶が再度顕在化していることも明らかになった。

三田牧(分担者)は、台湾と旧南洋群島での共同調査、およびこれまで独自に行ってきた旧南洋群島パラオでの調査をもとに、パラオ人の植民地経験を分析し、パラオ人の視点から「帝国」日本を理解することを試みた。台湾との比較からは、日本を含め島としてのつながりをイメージする太平洋諸島民の世界認識が植民地支配の理解にも影響を及ぼしているという仮説にたどり着いた。

松金公正(分担者)は以下のような調査研究を行った。(1)国立故宮博物院図書文

献館において、台湾に移動してきた後の「故宮」に関する資料収集・整理を行い、台湾における「故宮」の役割を分析した。「故宮」は本来、中華の象徴と位置付けられてきたが、中華の伝統文化を踏まえた新たな文化を創造し、それによって中華を台湾を構成する要素として展示するという役割へと向かいつつあることを示した。

(2)国史館、国史館台湾文献館において、植民地期の台湾佛教に関する資料収集・整理を行った。そして、戦前と戦後の間の台湾における「日本仏教」に対する認識の連続性と非連続性についての検討を行った。

宮岡真央子(連携研究者)は、日本の台湾先住民族に対する政策と植民地主義的まなざし、その国民党政権による継承、今日に至る現地社会への影響、それを払拭しようとする先住民族の諸実践について、台湾での現地調査をもとに教科書教材、歴史的事件、土地制度などの諸観点から明らかにした。またそれらと日本の人類学による学術調査との関係についても考察した。

今泉裕美子(研究協力者)は、歴史学の史料を使いながら、たとえば沖縄からの南洋移民について、政府や企業の南洋群島経営、その下でのウチナーンチュの仕事と生活(製糖業と漁業を中心に)、ミクロネシア現地住民との関係を明らかにした。また、南洋群島における朝鮮人戦時労働員について、日本の南洋群島占領以来の南洋群島経済と朝鮮半島からの人の移動、南洋群島への定着の歴史、朝鮮人親睦会の形成などを踏まえながら、南洋群島戦時経済の特徴のなかで明らかにした。

黒崎岳大(研究協力者)は、マーシャル諸島マジュロ市での聞き取り調査をもとに、同市内にある日本に関連する二つの碑文(聖恩記念碑(大正期建立)および東太平洋戦没者の碑(S.40年代建立))について、各々の碑文が建立された時期のマーシャル諸島における日本の経済開発の状況を踏まえながら、日本の同地域への「進出」と碑文に対する現地の人々の意味づけとの関連について考察した。

藤野陽平(研究協力者)は、台湾における日本語によるキリスト教の場を調査・研究した。キリスト教が、日本語族台湾人と日本人妻という異なったエスニシティをもつグループを「日本語」や「日本」への郷愁を通じて一つのグループとして結合していることや、求められている日本という場合は台湾の文脈を反映した「ゆるやかな日本空間」であることが明らかになった。

林虹瑛(研究協力者)は、日本統治時代の台湾人のための最初の官製日本語教科書『新日本語言集甲号』を事例に、応急用の日本語-台湾語両用教科書の形成された背景、その編纂に関係した人物と内容分析から当時の言語接触の様子、統治者側の考え及び教科書の使用状況を明らかにした。

山西弘朗(研究協力者)は、台湾に関しては、先住民と漢人の日本教育世代の方々からライフヒストリーを聞き取り、外来政権である日本による植民地統治や、その後の国民党による統治に対する評価や比較を行った。また、旧南洋群島に関しては、天理大学付属天理図書館において、戦前パラオから天理教管内の学校に留学した人々や、パラオにおける天理教の現地人に対する布教について文献調査を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 55 件)

三尾裕子(印刷中)「「体験」の語りを通じていくこと 約70年の時を越えた「再会」を通して考えるー」西井涼子編『人文学のフィールドサイエンス(仮称)』pp.238-255、東京外国語大学出版会、査読有

ENDO, Hisashi 2013 The Beginning of the 'Postwar Period': Japan and the United States of America as Un-decolonized Alien Powers to Micronesia (former Nan'yo gunto) 『京都文教大学 総合社会学部研究報告』15、pp.1-9 査読有

上水流久彦 2013「境域の人類学的研究に関する理論的検討 - 台湾東部と八重山、韓国南部と対馬をめぐって」『世新日本語文研究』5、pp.1-22、査読有

松金公正 2013「戦後真宗大谷派台北別院 日本仏教在台湾的印象形成」『台湾学研究』15、pp.95-118、査読有

宮岡真央子 2013「呉鳳をめぐる信仰・政治・記憶」、『台湾原住民族研究』17、pp.24-50、査読有

Iitaka, Shingo 2013 'Saipan Town on Angaur Island, Palau: Contact among Micronesian Mine Workers under the Japanese Administration' "The Bulletin of the University of Kochi, Faculty of Cultural Studies" 62 pp.13-24、査読有

遠藤央 2012「脱植民地期パラオにおける公共圏の問題系 ミクロネシア・沖縄問題の設定に向けて」柄木田康之・須藤健一編『オセアニアと公共圏 - フィールドワークからみた重層性』pp.189-202, 274p、昭和堂、査読有

上水流久彦 2012「台湾の本土化後にみる外省人意識」、沼崎一郎・佐藤幸人編『交錯する台湾社会』pp.139-173、アジア経済研究所、査読有

松金公正 2012「台北故宮と『中華』との距離 『建院70周年』と『建院80周年』との間の連続性と非連続性」沼崎一郎・佐藤幸人編『交錯する台湾社会』pp.209-250、アジア経済研究所、査読有

石垣直 2012「現代台湾をめぐる『求心

力・遠心力』と原住民 ブヌンの事例を中心とした初歩的検討」沼崎一郎・佐藤幸人(編)『交錯する台湾社会』pp.101-137、アジア経済研究所、査読有

IITAKA, Shingo 2011 'Conflicting Discourses on Colonial Assimilation: A Palauan Cultural Tour to Japan, 1915' Pacific Asia Inquiry. 2(1) pp.85-102. 査読有

飯高伸五 2012「高知から南洋群島への移住者・森小弁をめぐる植民地主義的言説の批判的検討」『高知県立大学紀要 文化学部編』61, pp.21-37 査読有

三尾裕子 2011「警察官用原住民語教科書に見える原住民へのまなざし」植野弘子・三尾裕子編『台湾における 植民地 経験 - 日本認識の生成・変容・断絶』pp. 259-299、風響社、査読無

植野弘子 2011「台湾の日常と「日本教育」 - 高等女学校生の家庭から」植野弘子・三尾裕子編『台湾における < 植民地 > 経験 日本認識の生成・変容・断絶』, pp.141-184, 風響社、査読無

上水流久彦 2011「『周辺』にみる国民国家の拘束性 - 台湾人の八重山観光を通して」『北東アジア研究』20, pp.51-66、島根県立大学北東アジア地域研究センター、査読有

上水流久彦 2011「対馬海峡から見る台湾と八重山の『交流』」、『白山人類学』14, pp.31-52、査読有

西村一之 2011「台湾東部漁民社会における中国人 大陸漁工をめぐる民族関係」『白山人類学《特集》台湾をめぐる境域』14, pp.53-80、査読有

松金公正 2011「台北故宮における『中華』の内在化に関する一考察 国立故宮博物院 組織法の制定を中心に」植野弘子、三尾裕子編『台湾における 植民地 経験 - 日本認識の生成・変容・断絶』pp.55-98、風響社、査読無

植野弘子(陳萱訳) 2010「日本統治時期 台南之高等女学校生 - 従生命史観察「日本」経験與伝統習俗」戴文鋒主編『南瀛歴史、社会與文化』pp.143-147、台南県政府、査読有

[学会発表](計 41 件)

MIO, Yuko 2014.6.17-20(発表決定)《国際学会招待パネル発表》“Continuity and Discontinuity seen in the Japanese Anthropological Tradition: A Case of Dr. UTSURIKAWA Nenozo”, in World War II Anthropology, American Association for the Advancement of Science, Pacific Division Annual Meeting, June 17-20, University of California, Riverside.

上水流久彦 2014.5.17-18「八重山と台湾との境域にみる記憶の継承」日本文化人類学会第 48 回研究大会、幕張メッセ

宮岡真央子 2013.8.28「呉鳳をめぐる信

仰・政治・記憶 植民地統治の遺物の暴力性が発揮される状況に関する一考察」第 6 回日台原住民族研究フォーラム、台北：国立政治大学

西村一之 2013.6.16「台湾東海岸における漁撈技術 植民地経験・移動・境界」東アジア近代史学会第 18 回研究大会シンポジウム「境界」認識の変容と活用 国境把握をめぐる知識の現在形」、中央大学多摩キャンパス

飯高伸五 2013.6.15「パラオ諸島における日本統治期の鉱山採掘跡の現状と課題」太平洋諸島学会第 1 回研究大会、明治大学

飯高伸五 2013.6.8「太平洋戦争の記憶のヘゲモニーへの抵抗と日本認識 - パラオ諸島アンガウル島の事例から」日本文化人類学会第 47 回研究大会(分科会「日本認識の形成からみた植民地支配、戦争の記憶 台湾、韓国、パラオ、中国から」) 慶應義塾大学

西村一之 2013.5.26「台湾東海岸における「日本」とのつながり 日本化から中華化のなかで」日本台湾学会第 15 回学術大会(分科会「台湾とパラオにおける植民地経験 接触領域にみる「日本」」) 広島大学東広島キャンパス

飯高伸五 2013.5.26「旧南洋群島における日本人移住者と現地人の「ハーフ」がたどった戦後史」日本台湾学会第 15 回学術大会(分科会「台湾とパラオにおける植民地経験 - 接触領域にみる「日本」」) 広島大学

石垣直 2013.5.26「交錯する『植民地経験』 台湾原住民・ブヌンと『日本』との衝突・接触・邂逅」日本台湾学会第 15 回学術大会、広島大学東広島キャンパス

三田牧 2013.5.26「古きよきパラオ」の語られ方にみる日本統治経験 パラオ、日本、アメリカの価値観をめぐって」日本台湾学会第 15 回学術大会、広島大学

上水流久彦 2013.3.23「日本統治時代の建築物の現在 - 消費される「日本」日本オセアニア学会第 30 回研究大会(分科会「旧南洋群島と台湾における日本イメージの形成 - 植民地支配に関わるモノを通じて」) 日光総合会館

宮岡真央子 2013.3.23「牡丹社事件をめぐるモノの記憶と政治」第 30 回日本オセアニア学会研究大会、日光総合会館

上水流久彦 2012.11.17「外部化と内部化のための台湾 八重山の事例を通して」第 37 回日本文化人類学会中国・四国談話会シンポジウム「東アジアの境域をめぐる人類学 八重山/台湾、対馬/釜山を事例に」県立広島大学

西村一之 2012.11.17「海に境が生まれるなかで 台湾東部漁民による漁撈の経験と実践」第 37 回日本文化人類学会中国・四国談話会シンポジウム「東アジアの境域をめぐる人類学 八重山/台湾、対馬

／釜山を事例に」県立広島大学
 西村一之 2012.6.23 「台湾東部における抗日事件の記憶と歴史 - ノスタルジー・民族意識・観光」, 日本文化人類学会第46回研究大会、広島大学
 西村一之 2011.6.12 「移動・移住の経験と実践 - 東シナ海国境海域をゆきかう漁民たち」日本文化人類学会第45回研究大会(分科会:「越境経験の資源化・歴史化:日本の周辺地域における国境変動をめぐって」)法政大学
 上水流久彦 2011.6.12 「越境経験の資源化と歴史化日本の周辺地域における国境変動をめぐって」日本文化人類学会第45回研究大会、法政大学
 宮岡真央子 2011.6.12 「歴史事件の再解釈と資源化 - 台湾原住民族パイワンによる「牡丹社事件」をめぐる交渉」日本文化人類学会第45回研究大会、法政大学
 植野弘子 2010.12.28 「台湾漢人社会的殖民主義と対「日本」的認識 従日本人類学研究来看」「外来権力(含日本)多層累積形成的歴史認識 台湾與旧南洋群島の人類学比較」台北研究会、中央研究院
 Endo, Hisashi 2010.12.28 “The beginning of the ‘Postwar Period’: Japan and the United States of America as Un-decolonized Alien Powers to Micronesia (Nan’yo gunto)” paper read at Academia Sinica, Taipei, 「外来権力(含日本)多層累積形成的歴史認識」台北:中央研究院民族學研究所
 ①MIO, Yuko 2010.11.11-12 “Historical recognition constructed under control of multi-layered foreign powers, including Japan: An anthropological comparison between Taiwan and Micronesia”, CAPAS-MARC 2010 Workshop: Migration, Network and Colonial Legacies in Pacific Islands, Academia Sinica
 ② IITAKA, Shingo 2010.11.11-12 ‘Cultural Tours to Japan Taken by Micronesian Islanders: Reflections on the Haunting Colonial Discourse on Assimilation of ‘Primitive Peoples’ ‘CAPAS-MARC 2010 Workshop: Migration, Network and Colonial Legacies in the Pacific Islands.台北:中央研究院
 ③ MIO, Yuko 2010.11.5-6 《招待講演》“Historical, Present-day and Future Prospects for Taiwan Studies in Japan: An Anthropological Perspective”, An International Forum on the Past, Present and Future of Taiwan Studies beyond Taiwan: Europe, North America, and Japan Compared, Institute of Sociology, Academia Sinica
 ④宮岡真央子 2010.11.6 《招待講演》「時代を隔てた二人の学術探険家 森丑之助

と楊南郡先生」, 楊南郡先生及其同世代台灣原住民研究與台灣登山史國際研討會、花蓮:國立東華大学
 (図書)(計6件)
 上水流久彦、村上和弘、西村一之編、印刷中『境域の人類学 - 八重山・対馬にみる「越境」』ページ数未定、風響社
 植野弘子、三尾裕子編 2011『台湾における<植民地>経験 日本認識の生成・変容・断絶』347 pp.風響社
 石垣直 2011『現代台湾を生きる原住民ブヌンの土地と権利回復運動の人類学』404pp.風響社
 上水流久彦、上田崇仁、崔錫榮、中村八重 2010『交渉する東アジア 近代から現代まで - 崔吉城先生古稀記念論文集』276pp.風響社
 (産業財産権)
 出願状況(計0件)
 取得状況(計0件)
 (その他)
 なし
 6. 研究組織(ステータスは平成25年度時)
 (1)研究代表者
 三尾 裕子(MIO, Yuko)
 東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授
 研究者番号:20195192
 (2)研究分担者
 植野 弘子(UENO, Hiroko)
 東洋大学・社会学部・教授
 研究者番号:40183016
 上水流 久彦(KAMIZURU, Hisahiko)
 県立広島大学・地域連携センター・講師
 研究者番号:50364104
 西村 一之(NISHIMURA, Kazuyuki)
 日本女子大学・人間社会学部・講師
 研究者番号:70328889
 遠藤 央(ENDO, Hisashi)
 京都文教大学・人間学部・教授
 研究者番号:10211781
 飯高 伸五(IITAKA, Shingo)
 高知県立大学・文化学部・講師
 研究者番号:10612567
 石垣 直(ISHIGAKI, Naoki)
 沖縄国際大学・総合文化学部社会文化学科・講師
 研究者番号:60582153
 三田 牧(MITA, Maki)
 神戸学院大学・人文学部・准教授
 研究者番号:50455234
 松金 公正(MATSUKANE, Kimimasa)
 宇都宮大学・国際学部・教授
 研究者番号:50334074
 (3)連携研究者
 宮岡 真央子(MIYAOKA, Maoko)
 福岡大学・人文学部・准教授
 研究者番号:70435113